

## 資料紹介 『足栗毛』

石井志徳\*

『足栗毛』という館蔵の資料がある。この『足栗毛』は、刈和野の旅籠屋での場面から始まり、五輪坂より見た土崎湊の遠景の場面まで、羽州街道沿いの町や村・名所などを二十の場面に分けて描いたものである。

本稿は、この資料の翻刻と図版の紹介を行うものである。

### 一 『足栗毛』の概要

館蔵資料の『足栗毛』は、紙本着色で、体裁は半紙判、四ツ目綴、縦二三・三cm×横一六・七cmである。

資料の名称、作成年代、作者（著者）、作成の目的は、序文と本文から次のように考えられる。

序文の標題に「足栗毛」と記され、序文の文中にも「足栗毛とぞ名を呈し」とある。また、表紙の題箋に「足栗毛 出羽街道」とある。この「足栗毛」という言葉は、おそらく十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の「膝栗毛」をもじったものであろう。「膝栗毛」とは、膝を栗毛の馬の代用とする意味で、徒歩で旅行することや住所を定めぬいで諸方を浮浪することを指す。この「足栗毛」も「足を栗毛の馬の代用とする徒歩旅行」のことを指すと考えられる。旅案内記的な性格を持つものとして、著者がこの題名を付けたのであろう。

作成年代は、序文に「嘉永七甲とらのとし 孟春朔旦」とあることから、嘉永七年（一八五四、十一月に安政と改元）と分かる。

作者は、序文に「ある主人写」とあるだけで不明である。しかし、序文を見ると『史記』の秦の趙高の故事の引用や、「松に雅琴のしら

べとや 浪に鼓の音あるとや」という『東海道中膝栗毛』の引用が見られることや、「詳述は避けるが本文中の漢詩・狂歌・川柳などから、ある一定レベルの教養を持った人物であることは容易に推測できる。

作成の目的については、序文の

浮世に生し其国を見ず果行人多し

席上即坐の便とも規矩に心を慰むの一助ならんかし

みだりに嘆筆を採

という部分から考えてみたい。この部分から、この世に生まれながら、自分の生まれた土地のことを見ないまま亡くなる人も多いため、当座の間に合わせとして、あるいは机上旅行の手引きとして、少しでも心の慰めになればと思いい立ち、筆を取ったという作者の気持ちが読み取れる。そして、作者として自分がふさわしくないかもしれないが、そうした思いから『足栗毛』を作成するのだという意図が表れている。したがって、旅をせずともその場で羽州街道沿いの様子を知ることができるように、簡便な旅の手引き書となるようにということを用意して作成されたと言える。

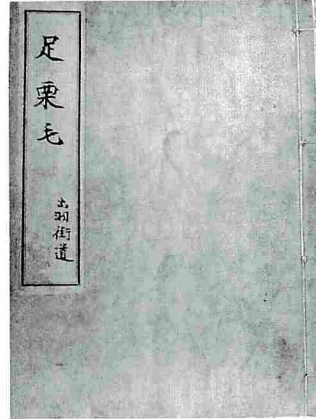
### 二 資料の翻刻と図版の紹介

次に『足栗毛』の翻刻と各図版の紹介を行う。

なお、翻刻に際してはなるべく資料に忠実に行ったため、誤記と思われるものは括弧内に正しいと思われる文字を補足している。また、**■**は虫食いのため文字が読めないものである。原本には一部ルビが付

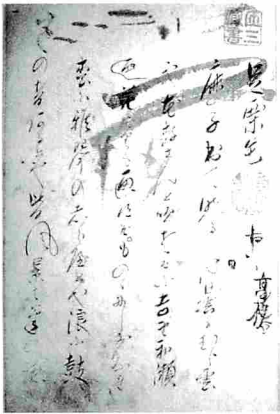
けられているが、それもそのまま使用している。各図版の右肩に付した標題は、検索の便宜上、筆者が付けたものである。

(表紙)



足栗毛 出羽街道

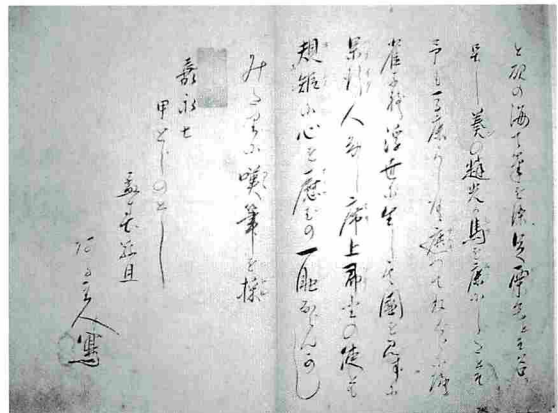
(序文)



足栗毛

鹿の子出て、照る月曇るむら雲  
や、花散さんと吹さそふ、吉野初瀬  
の花よりも、遍道ぞもののにしきなれ、  
松に雅琴のしらべとや、浪に鼓ミ  
の音あるとや、皆風景は筆の穂

(序文)



と、硯の海で筆を染、足栗毛とそ名ヲ  
呈し、葵(秦)の趙光(高)か馬を鹿にしたとぞ、  
予も馬鹿らしく遮つて、ねぐらに帰る  
雀なれ、浮世に生し其国を、見ずに  
果行人多し、席上即坐の便とも、  
規矩に心を慰むの、一助ならんかし  
みたりに噴筆を採  
嘉永七

甲とらのとし

孟春朔旦

ある主人写

(①刈和野)



刈和野京屋

はたこや之図

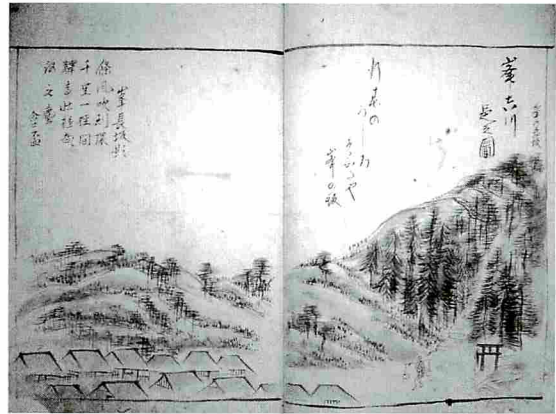
はたこやに

まだ暮かねつ

春の旅

旅のうさ  
はらしこそすれ  
そこ豆の  
水ふくれなる  
おしやれ女の顔

②峰吉川

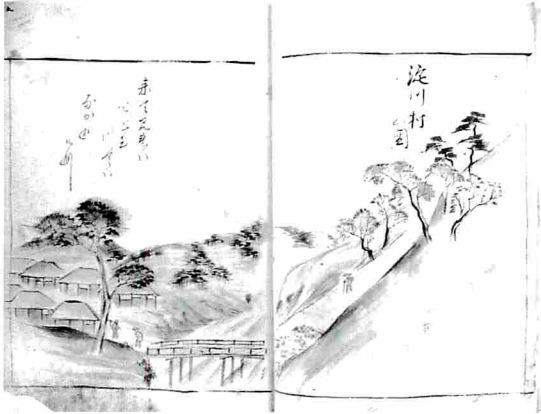


峯吉川邑之図

行春の  
うしろすかたや  
峯の坂

峯長坂影  
條風吹到隈  
千里一徑間  
駅亭壯遊哉  
何無塵合盃

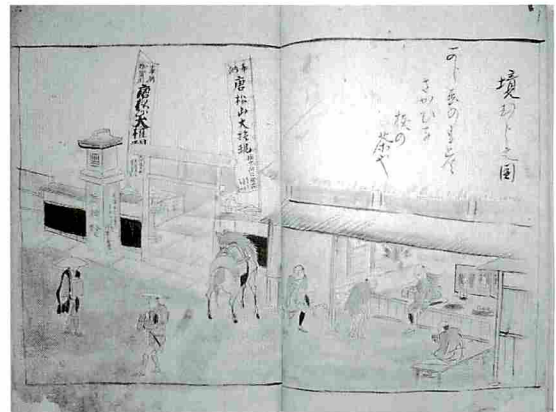
③淀川



淀川村の図

来て見れば  
よとむ川てハ  
なかりけり

④境



境むら之図

から松の  
もとてさかひる  
枝の茶や

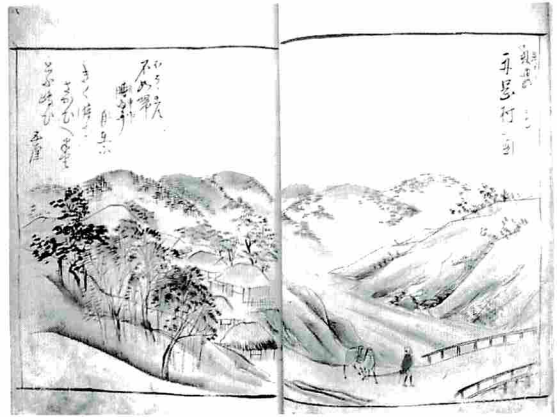
⑤唐松山



唐松山大権現縁起

抑 唐松山大権現と申奉るハ、愛宕権現と同體して、  
地蔵薩埵の分身也。愛宕ハ此山の元、豐見山と号し、後  
復愛宕と改む。人王四十九代光仁帝の御宇、天応元年  
辛酉、沙門慶俊、此山を開闢して愛宕大権現と崇  
祭し奉る。神勅に依て地蔵尊を以て本地仏と称し、謹而  
当山鎮守の来由ヲ尋ね奉るに、人王七十代後冷泉  
院の御宇、源朝(頼)義朝臣勅を奉る。奥州(下向)し、賊魁  
阿部の貞住(任)、高の宗任をせめ、鋒の挿(官軍既に敗  
軍、賊威益震わんとせしに、慈嫡八幡太郎義家、武略擧  
貞住(任)を誅し、宗任を虜となし、奥州悉く平定に  
及バ、とハ、賊弟講師宦官照、阿部の残党を集て、出  
羽の境ノ地に楯籠、鎮守ましましたまふ

⑥ 船岡



是ヨリ秋田郡ニナル  
船岡村の図

不如帰  
ほとじきす  
時ゆう

自在に

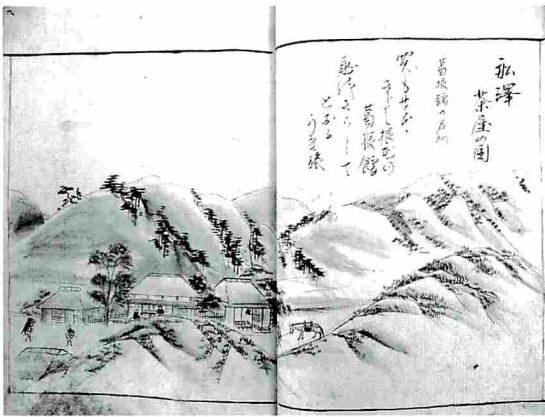
きく時は

さかひへ半里

とふ嶋ひ

五厘

⑦ 船澤



船澤

茶屋の図

葛根餅(餅)の名物

買もせず

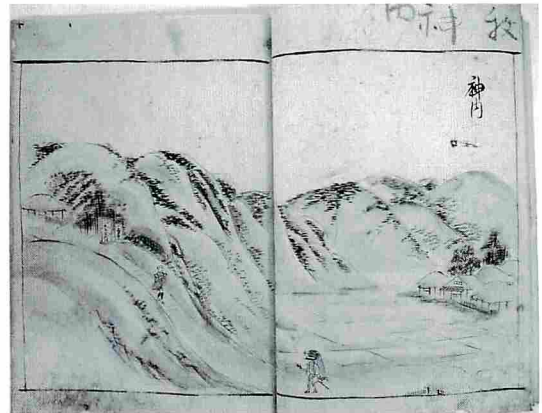
さらし根花の

葛根餅(餅)

恥をさらして

とおるうき旅

⑧ 神内



神内

⑨ 石川の渡し



石川渡場  
之図

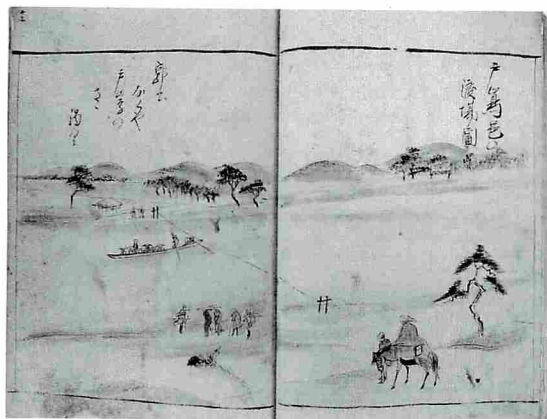
ゆく水ハ

矢をいる如く

石川の

岩おもとふし

くわの弓こそ



⑪ 戸島の渡し

郭公  
なくや  
戸島の  
さゝ  
濁り

戸島邑の  
渡場図



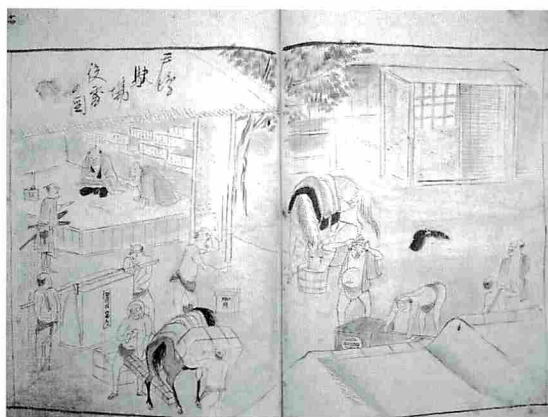
⑩ 和田

和田村  
わた々と  
ふるふようふ  
なり  
むらのさま



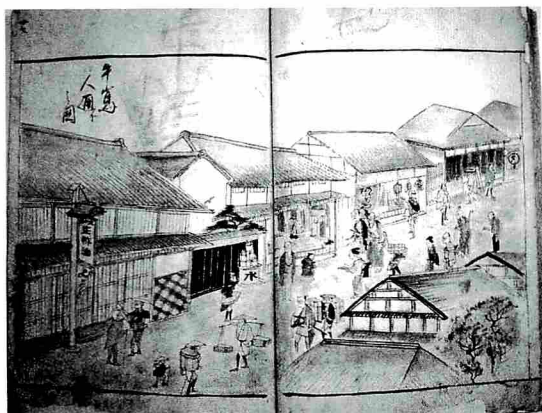
⑬ 御所野

猿田街道  
御所野の風景  
横山を詠め  
新谷砂山遠見の図  
松原や  
扇の鶴も  
羽を休め  
極楽も かくやと  
ばかり  
御所の原



⑫ 戸島駅

戸島  
駅  
役場  
の  
図



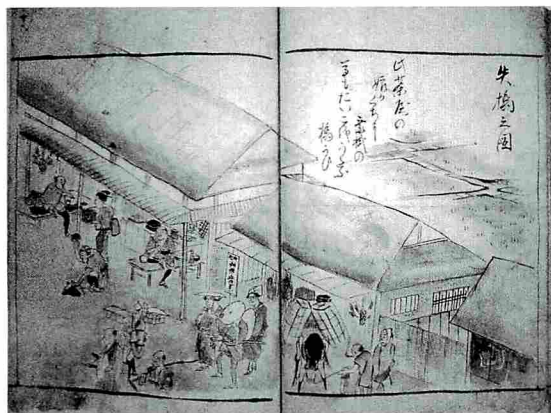
(15)牛島

牛島  
人通り  
之図



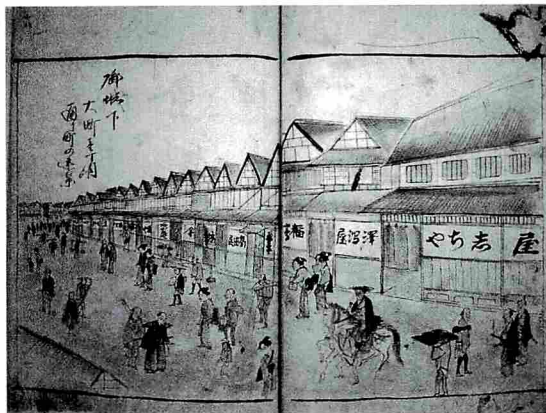
(14)四ツ小屋

四つ子屋より  
牛島の遠景



(17)八橋

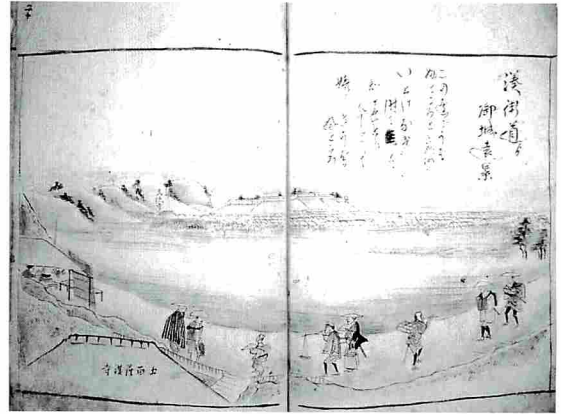
矢橋之図  
此茶屋の  
娘かくちに  
乗掛の  
馬もたいこを  
うたふ  
橋かひ



(16)大町

御城下  
大町壺丁目より  
通り町の遠景

(18) 西来院付近



湊街道より

御城遠景

この辺にうば

ふところと云処あり

いとけなき

時は三ツとハ

知るれとも

今聞へて

嬉しき うばか

ふところ

(20) 土崎湊遠景



五輪坂より

湊風景

ゆくふねを

つなきて

ひくや

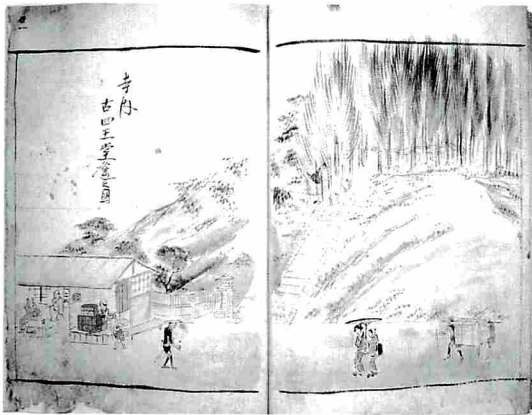
遠かすみ

くる、日を

はなれかねけり

春の舟

(19) 寺内



寺内

古四王堂邊之図

## 三 各場面の概観と『足栗毛』の資料的価値

『足栗毛』に記されている二十の場面の翻刻と図版を紹介してきたが、次に各場面を概観し、『足栗毛』の資料的価値を考えてみたい<sup>(20)</sup>。

## (一) 各場面の概観

①刈和野の旅籠屋の場面に「京や」という旅籠屋が登場する。この旅籠屋は、河辺郡船岡村の五十嵐孫之丞という人物が書いた寛政五年(二七九三)の「三山参拝記」<sup>(21)</sup>と、館蔵資料で安政五年(一八五八)に出版された「五街道中細見記」に記されている宿「京屋太助」と考えられる。この場面には、宿の部屋で按摩に肩を揉ませている客とその客に対して茶を淹れる女中の姿、風呂桶に浸かっている客の姿、「京や」「火の用心」と書かれた行灯などが描かれている。

②峰吉川の場面では、画面右下に描かれている鳥居に注目したい。この鳥居は『久保田領郡邑記』に「峰吉川村より峰の山上り口右に鳥居あり」と記されているものと考えられる。

③淀川は、次の場面に描かれている境村と十五日交替で宿駅を務めた村であった。この場面では、前掲の「三山参拝記」に「上淀川入口二大橋あり」と記されているものと同じと考えられる橋が描かれている。また、「淀川」を洒落た「来て見れば よとむ川てハ なかりけり」という滑稽な川柳が記されている。

④境の場面では、唐松神社の参道手前の鳥居と茶屋の様子が描かれている。鳥居脇に描かれている幟には「講中 阿仁銀山町」と「久保田大町」と幟の奉納者の地域名が、石灯籠には「天保十三年」と奉納された年がはっきりと書かれている。「から松の もとでさかひる枝の茶屋」という川柳には、境村の「さかい」と「栄える」が懸詞になっているところが面白い。

⑤の場面は見開きの右頁に「唐松山大権現縁起」と題して唐松神社の縁起が記され、左頁には社殿が描かれている。社殿に掛けられている額には神功皇后と武内宿禰と思われる人物が描かれている。

⑥船岡の場面に描かれている橋は、前掲の「三山参拝記」にある「夫より一ノ渡橋あり、此所より内郷二入る」橋と考えられる。

⑦船澤の場面の狂歌に登場する「さらし根花の葛根餅(餅)」は、この土地の名物「蕨餅(根花餅)」のことであり、蕨の根からでんぷんをとりだして作る。参勤途中の久保田藩や津軽藩の藩主がここで休息し餅を食べていたとされる<sup>(22)</sup>。また、熊谷新右衛門によって書かれた天保八年(一八三七)の「秋田日記」にも見られ、「東海道西坂よりは大違也。誠うまし」と賞賛されている<sup>(23)</sup>。

⑧神内の場面には村名のみが記されているだけで、狂歌や川柳などはない。このように文字情報が場面の名称のみというものは、神内他では⑫戸島駅、⑭四ツ小屋、⑮牛島、⑯大町、⑰寺内の五場面を含めて六場面ある。この場面には、笈を担ぎ錫杖を持って歩く行者風の人物と一般の旅人と思われる人物が描かれている。「太平山大権現」と書かれた石碑と「庚申」と書かれた石碑が坂の途中に描かれている。

⑨石川の渡しと⑪戸島の渡しの場面では、岩見川の一ノ渡と二ノ渡の様子が描かれており、いずれも曳舟で川を渡す様子が描かれている。舟渡の様子を示す貴重な資料と言える。

⑩和田の場面では、「わた々と ふるふようふなり むらのざま」という地名を洒落た川柳が記されている。和田村も⑫戸島駅と十五日交替で宿駅を務めていた。

⑫戸島駅の場面には、宿駅の役所の様子が描かれており、駅を訪れた武士と役人、人足同士がにこやかな表情で談笑する様子が描かれているのが印象的である。

⑬御所野の場面では、御所野の松原から新屋の砂山のある日本海方向を遠望するという視点で描かれており、宅地化の進んだ現在の秋田市の御所野地区からは想像できない当時の風景が描かれている点が貴重である。「極楽も かくやとばかり 御所の原」という川柳から、当時の景観が偲ばれる。

⑭四ツ小屋の場面では、⑬の場面と同じような構図で四ツ小屋から



日本海方向に新屋の砂山とその手前には潟が描かれている。この潟は、大野潟・二ツ屋潟であろうと考えられるが、開田が進み、のちに宅地化され、現在は町名に名残があるだけで潟はない<sup>(6)</sup>。四ツ小屋から牛島そして城下へと続く家並みが遠近法的に描かれている。

⑮牛島、⑯大町、⑰八橋の三場面は、久保田城下とその近在の町の様子を描いている。⑱大町の場面で描かれている大町一丁目の家々が整然と軒を連ねている様子は圧巻である。それに対して⑮牛島と⑰八橋の場面は、大町とは趣を異にして描かれている。特に⑰八橋の場面は雑然とした賑わいとも言える街道沿いの茶店の軒並みが描かれている。その町並みを行き交う人々を見ると、行者風の人や琵琶法師、武士や商人など様々な身分の人が描かれ、その人々の衣服や持ち物が詳細に描かれている。また、商店の看板や店舗内外の様子なども詳細に描かれている。

⑲西来院付近の場面では、現在秋田市寺内にある西来院が画面左下に「五百羅漢寺」として描かれている。西来院は『寺内町誌』に「俗に五百羅漢と称」しているとある<sup>(7)</sup>。周辺の「姥懐<sup>うばかこ</sup>」にちなんだ狂歌が付されている。

⑳寺内の場面では古四王神社の参道とその門前の様子が描かれている。門前の店先には「二八」と書かれた行灯が下げられており、おそらくそば屋であろうと考えられる。古四王神社の門前には「梅の湯茶屋」があったことが知られるが<sup>(8)</sup>、それは描かれていないようである。また、神社の境内の様子は、鬱蒼と茂る木々に囲まれているため見えない。

㉑土崎遠景の場面では、夕日に暮れゆく土崎湊を五輪坂より遠望した景色が描かれており、画面右奥には男鹿半島が描かれている。五輪坂は両津山にあるため両津坂とも言うが、五輪坂があったためこの名が付けられた。五輪塔は、文化元年（一八〇四）の象潟地震と文化七年（一八一〇）の男鹿地震のため崩れ果ててしまったが、石灯籠一基が明治初年まで残っており、常夜灯として船舶の出入りの便を図つ

ていたとされる。画面右に描かれている灯籠は、その石灯籠と考えられる<sup>(9)</sup>。

## （二）『足栗毛』の資料的価値

以上、筆者の力量不足で十分に資料の持つ情報を読み取れたとは言いが『足栗毛』に描かれている二十場面を概観してみた。次に、今回読み取れた情報から『足栗毛』の資料的価値について考えてみたい。

冒頭で「膝栗毛」をもじって『足栗毛』としたのだろうかと思いたが、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』は、同時代から「何々栗毛」「何々参り」「何々土産」など多数の亜流本が刊行されており、その総数は不明であるが、それらの亜流本は「膝栗毛物」と呼ばれ、全国各地に存在している<sup>(10)</sup>。

そこで『足栗毛』と『東海道中膝栗毛』とを比較してみると、『足栗毛』には本文と呼べる文章がないという大きな違いがあるが、一方で、滑稽な狂歌・川柳が詠まれていること、旅行案内記の性格を持つこと、庶民の視点で書かれていることといった類似点が挙げられる。

したがって、『足栗毛』も「膝栗毛物」の範疇に入れてよいのではないかと考える。

『足栗毛』は絵もそれほど上手ではなく、誤字や落書きなどもあり、決して上作とは言いが、各地の見所や名産、その土地土地で『足栗毛』の作者が見たことや感じたことが素朴で暖かみの感じられる絵で表現され、かつディテールもよく書き込まれている。さらに狂歌や川柳、漢詩が各場面の絵と相まって、より一層、旅行案内記としての楽しみを加えている。ただ見るだけでも面白い資料だが、『足栗毛』の書かれた時代の羽州街道沿いの村や町の様子を窺い知ることのできる貴重な郷土史の資料でもあると言える。そして、秋田の地にもこうした旅行案内記的なものに対する需要があり、さらにはその需要に応えうる力量を持った人物が存在したという江戸時代後期の秋田の文化

的な水準をある程度類推できる資料であるとも言えよう。

なぜ刈和野から土崎港の遠景までを描いたのかという疑問点は残るものの、今後『足栗毛』に類似した資料が秋田県内でも発見されることへの期待と合わせて今後の課題としたい。

### 註

(1) 十返舎一九作 麻生磯次校注『東海道中膝栗毛 上』(岩波文庫、一九七三年)の「二編上 浮世道中膝栗毛後編」の書き出しに、

「長明が東海道記に曰、松に雅琴の調あり、浪に鼓の音ありと。」

とある。同書の脚注は、海道記の字度の浜の「この浜を過ぐれば、松に雅琴あり、浪に鼓あり、天人の昔の楽今聞くに似たり」の部分の引用であるとしている。そのため筆者は、この部分は『東海道中膝栗毛』からの引用であると考えている。

(2) 各場面の概観に当たっては、以下の文献を参考にしている。そのため、次の文献に触れられている部分に関しては特に註を付けない。

秋田県『秋田県史 第二巻 近世編上』(一九七七年)

秋田県教育委員会『秋田県文化財調査報告書第一三二集 歴史の道調査報告Ⅵ 北部羽州街道』(一九八五年)

秋田県教育委員会『秋田県文化財調査報告書第一四一集 歴史の道調査報告Ⅷ 南部羽州街道』(一九八六年)

国安寛編『街道の日本史一〇 雄物川と羽州街道』(吉川弘文館、二〇〇一年)

斎藤實則『湯沢叢書 8 羽州街道の変遷』(建設省東北地方建設局湯沢工事事務所、一九九八年)

柴田次男編『校訂・解題 久保田領郡邑記』(無明舎出版、二〇〇四年)

(3) 戸川安章「河辺郡船岡村五十嵐孫之丞の三山参拝記」(『出羽三山と修験道』岩田書院、二〇〇五年)。以下、この日記を拙稿では「三山参拝記」とする。

(4) 協和町『協和町史 上』二六四頁、三〇二頁(二〇〇一年)  
伊澤慶治編『御参勤御道中日記』(彦榮堂、一九八九年)

(5) 熊谷新右衛門『秋田日記(普及版)』(翻刻 伊澤慶治・現代語解説 小松宗夫、無明舎出版、二〇〇五年)

(6) 館蔵の「出羽国秋田領六郡絵図」(紙本着色、一八五cm×二七二cm、年代不明)には、牛島新田村の西に「牛島潟」という潟が描かれており、その潟の中には島が描かれている。『日本歴史地名大系第五巻 秋田県の地名』(平凡社、一九八〇年)の大野村の項に「大野潟があった。大野潟とその東の二ツ屋潟とは接続した潟であったが、潟中島開田のため二分された」と記されている。前述の牛島潟は大野潟・二ツ屋潟と呼ばれるようになり、潟の中の島が潟中島であろうと考えられる。また、二ツ屋村の項には「天保四年(一八三三)に二ツ屋潟で魚網引が許可されている」ことが記されている。菅江真澄の『勝地臨毫 河辺郡』(文化十年(一八一三年)ごろ)には、大野潟が二ツ屋村と大野村に挟まれるように描かれているが、二ツ屋潟の名称は見られない。しかし、『勝地臨毫』の書かれた年代より後に二ツ屋潟が記録に残されていることから、『足栗毛』に見られる潟が、大野潟・二ツ屋潟のどちらかと断定はできないので、二つの潟の名を併記した。

(7) 寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』(一九四七年)

(8) 前掲(七)『寺内町誌』

(9) 前掲(七)『寺内町誌』。なお、五輪塔は口碑では元慶の乱の戦死者の供養のために建立されたとされるが、寛永二十一年(二六四四)久保田の森九蔵が父母あるいは娘の供養のため建立したとされる。また、文政の頃(一八一八〜一八三〇年)土崎湊の森田治右衛門が再建したとも言われている。

(10) 綿貫豊昭『膝栗毛』はなぜ愛されたか(講談社選書メチエ、二〇〇四年)